第 11 回文学フリマ（2010.12.5@大田区産業プラザ Pio）

エ -25　相関言論出版会

西嶋一泰 @souryukutsu
立命館大学院生・民俗芸能・サブカル・ネット
http://d.hatena.ne.jp/souryukutsu

マリン @marinx
慶応大学院生・政治学・政策学・討論型世論調査
http://marinweblog.blogspot.com/

文学 × 政治 × 文化の批評誌

アユラ

第一期
2006-2009
保存版

三人の研究者たちの四年の軌跡

西嶋一泰・深津謙一郎・マリン
ポストモダン・キャラクター・動物・ネオリベ
2045 年・計算不可能性・ヴァーチャル・リアル
ロスジェネ・非正規雇用・生きがい・セーフティネット
研究者・サヴァイヴ・象牙の塔・コミットメント

深津謙一郎
共立女子大学専任講師・日本近代文学・村上春樹
http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei/staff/fukatsu.html

総合議論サイト：相関言論空間アミノユラク
http://aminoyuraku.fc2web.com/
社会派ポッドキャスト：ゲンダイモンダイ
http://aminoyuraku.fc2web.com/

100P の完全保存版
1 部 600 円で販売！

ブクログのパブーで
電子書籍版も配布中

イラスト：浅乃ミサキ
http://hinah.fc2web.com/

http://p.booklog.jp/book/14672

文学 × 政治 × 文化の批評誌

アユラ

第一期
2006-2009
保存版

三人の研究者たちの四年の軌跡

西嶋一泰・深津謙一郎・マリン
ポストモダン・ギャルゲー・動物・ネオリベ
2045 年・計算不可能性・ヴァーチャル・リアル
ロスジェネ・非正規雇用・生きがい・セーフティネット
研究者・サヴァイヴ・象牙の塔・コミットメント

本誌は、文学、政治学、民俗学を志す三人の研究者が四年に渡って行ってきた多岐にわたる議論を収録している。各年の時代性とともに、今なお鋭さを失わない三人の切り口を、感じてほしい。

文学×政治×文化の批評誌『アユラ』第一期保存版

目次

・目次・プロフィール　〇一頁
・アユラ第一号（二〇〇六年一一月）
　鼎談「交錯するポストモダン」　〇二頁
・アユラ第二号（二〇〇七年一一月）
　鼎談「二〇四五年の計算不可能性」　二三頁
・アユラ第三号（二〇〇八年一一月）
　鼎談「ロスジェネなんてぶっ飛ばせ！」五二頁
・アユラ第四号（二〇〇九年一二月）
　鼎談「アカデミック・サバイバル」　七九頁
・アユラ第一期全号総目次・あとがき　九八頁

プロフィール

西嶋一泰（@souryukutsu）

一九八五年、大分生まれ、東京育ち、現在は京都で独り暮らし。立命館大学先端総合学術研究科の大学院生。専門は民俗芸能の現代史。主な論文は「一九五〇年代の文化運動のなかの民俗芸能　原太郎と「わらび座」の活動をめぐって」『コア・エシックス』六号、二〇一〇年。サブカル・デジモノも大好物。アユラでは編集を担当。

深津謙一郎

一九六七年三月、東京生まれ。専攻は日本近代文学。好きな作家は村上春樹。現在は共立女子大学で「日本文学演習」や「卒業論文ゼミナール」などを担当。共著書に、『村上春樹と小説の現在』（和泉書院・近刊）、『日本文学からの批評理論』（笠間書院）、『表象の現代』（翰林書房）などがある。

マリン（@marinx）

慶應ＳＦＣの大学院生（Ｍ２）。西嶋＆深津先生とは高校時代からの「幼なじみ」で一〇年来のお付き合い。政治学、政策分析、世論調査などで論文書いてます。二〇一〇年は本厄＆大殺界（笑）で大変な年でしたが、残すところもあと少しってことで、がんばりまーす。

イラスト　Wreath of Laurel　浅乃ミサキ

asano_misaki@hotmail.com　http://hinah.fc2web.com/

アユラ Vol.01

2006.11

鼎談「交錯するポストモダン」

Bunka

アユラ第一号鼎談

「交錯するポストモダン」解説

西嶋一泰

二〇〇六年から現在に至るまで続く西嶋、深津、マリンによる鼎談を「ギャルゲー」から始める必然性はあった（なお、ここでの「ギャルゲー」の定義は、一八禁の性描写を含む「エロゲー」と、全年齢対象の「ビジュアルノベルゲーム」を両方含んだ、いわゆる美少女キャラクターの立絵やＣＧと文章とＢＧＭを組み合わせて読み進むゲーム全般を指す）。東浩紀が二〇〇一年に『動物化するポストモダン』（講談社現代新書）で、当時カルト的な人気を誇ったギャルゲーメーカー「Ｌｅａｆ」および「Ｋｅｙ」の作品を大きく取り上げた。オタクこそが（良くも悪くも）ポストモダンの最も先鋭化した姿であり、さらにそのオタク文化の先端に「ギャルゲー」がある。東浩紀が引き起こした、サブカルに留まらない、現代思想や社会学も巻き込む大きな（とは言っても局地的な）ムーブメント、それを象徴するアイテムこそが「ギャルゲー」であったといえよう。東は、「ギャルゲーをやっているプレイヤー」をも作品の中に組み込もうとするギャルゲーのメタ構造に注目した。そのメタ構造の考察は後の『ゲーム的リアリズムの誕生』（講談社現代新書、二〇〇七年）においてより詳細に展開されている。また、東は二〇〇四年に『美少女ゲームの臨界点』、『美少女ゲームの臨界点＋１』という同人誌を編集しており、多くの論者やクリエイターが寄稿している。二〇〇〇年代前半の「ギャルゲー」は、東浩紀を抜きにしても、「ギャルゲー」というジャンルを越えて語りたくなるような熱気を帯びていたことは間違いがない。九〇年代以前の、ミニゲームとエロシーンが物語なく短絡していた単なる「キャラゲー」から、「弟切草」や「かまいたちの夜」といったサウンドノベルを経由することで、ゲームにおいて複雑な物語を語る形式が獲得された。そして、九〇年代の最大の遺物「エヴァンゲリオン」を引き摺るオタクたちが、もう一度「エヴァ」に向き合おうと挑んだジャンルこそが「ギャルゲー」だったのである。

さて、話を鼎談に戻そう。この鼎談でとりあげた「君が望む永遠」は、アージュが二〇〇一年に発売したギャルゲーである。ギャルゲーブームの中でも、必ず名前があがる一本だ。特徴としては、ファンタジー要素を含まない「リアルな」男女の三角関係が描写されており、その間で懊悩する主人公に感情移入すると鬱になってしまうほどで「鬱ゲー」の異名をとる作品である。なぜ、この作品を鼎談の題材に選んだのかというと、ギャルゲー未経験の近現代文学研究者である深津氏にも、おもしろさが解かる作品と考えたからである。三角関係の間で懊悩するというのは、近代文学作品にもよく現れるテーマであり、その現代版として「ギャルゲー」を捉えられるか、否か。ポストモダンなオタク文化を生きる西嶋が、近代文学研究者の深津に、現在の文化を提示してみる、という構図はアユラ第二号の鼎談にも引き継がれている。だが、実際の結果は、作品の読み方からして交錯していた。深津、マリンのある一つの（近代的に整合のとれた？）物語を読み込む姿勢に対して、同人誌も含めた多層な物語を享受する西嶋。あるいは、コミュニケーションにおける「他者」の存在を重要視する深津、それがオタクたちの独自のコミュニケーション空間を言語化しよう

とする西嶋。両者の立場性を踏まえたうえで、当時のガチンコの議論の雰囲気を感じていただければ幸いである。

第一回の鼎談は、前半がギャルゲーで、後半のテーマがネオリベである。マリン氏の「では、ここでテーマをガラッと変えて、保守主義の議論を始めたいと思います。」という、強引な話題転換にはまだ手探りだった鼎談の若々しさを読み取ることも可能だが、しかし、結果的にみれば前半の議論と全く異なる話をしているわけではない、ということに気づかされる。

深津氏は、政治の文脈においても、近代文学的「内面」を持った主体による政治を志向する。最終的には、深津氏において近代的な「内面」を持った主体を守るためならば、ネオコン流の自己責任をも選択するというスタンスをとることになる。深津氏が何を念頭においているのかといえば、やはり東浩紀の「情報社会論」など語られる「環境管理型権力」の存在である。極度に社会工学化が進むと、人々は主体ではなく、内面を持たない動物として管理される。だが、それは、見えないところでそれぞれの人々に最適化された非常に快適な状態なのである。しかし、その快適な工学的ユートピアを拝しても、非効率的ではあるが、人間の「内面」を信じ、それを前提としたコミュニケーションを志向する深津氏の軸はぶれない。

一方、広範の議論を牽引するマリン氏は、ネオリベラリズムの有用性を主張する。マリン氏は三人の中で、この「アユラ」各号を通じて最も政治的立場に変遷があるので第二号以降のマリン氏の議論も読み比べてみてほしい。リベラルの分配主義も、保守主義の単なる経済自由主義でもなく、まさに現在に最適な政治、政策を自らの手で切り拓こうとしているマリン氏のバイタリティーが遺憾なく発揮されているだろう。

第一号の鼎談は、まだ本当に手探りの状態で未消化な部分や洗練されていない点も数多いが、三人のガチンコ度やそれぞれの議論が持つ熱量は鼎談の中でも随一である。このあと、現在まで続いている三人の議論のはじまりの雰囲気を感じていただければ幸いである。

本誌の母体となっているホームページ、「相関言論空間アミノユラク」の管理人三人による鼎談が二〇〇六年の一〇月から一一月にかけて、ネット掲示板を通じて行われた。文学研究者の深津、政治・政策学を専攻するマリン、サブカル・ポストモダン論を得意とする西嶋。それぞれ文脈を異にする三人が格闘する様を楽しんでいただきたい。

一、「ギャルゲー」をどう楽しんだか

西　嶋　まずは「ギャルゲー」から、議論を始めたいわけなんですが、今回ギャルゲー初心者の深津さんに私からソフトを一本薦めまして、それをもとに議論をしようと思っています。そのソフトは「君が望む永遠」です。これはギャルゲーの中では、かなり「恋愛」に要素を特化したもので、いきなり「萌え」や「ＳＦ」のベタベタのソフトより入るよりかは、初心者でも理解しやすいソフトだと思って、今回深津さんに薦めました。この「君のぞ」は、主人公とそれをめぐる二人の少女、水月と遙の三角関係の物語なんですが、その二人の間で懊悩とする主人公の描写が話題を呼んだゲームです。「鬱ゲー」とまで、言われ、やると鬱になってしまうほど、悩んだり、落ち込んだりするゲームです。その意味では恋愛のリアリティもあり、また、主人公の内面が問題となるゲームなので、近代文学の研究者である深津さんにはいいと思ったんですが、実際やってみてどうでしたか？

深　津　「君のぞ」ですが、面白かったよ、ふつうに。二、三日は没頭したしね。ただ、楽しみ方としてはどうなんだろ。どうしても、内面的な意味でのリアリティを追いかけるところがあって、そうするとやっぱり、いわゆる水月エンド以外の結末を受け入れらないのね。いちおう、遙エンドってのも試してみたけど、どうもピンと来ない。全選択肢クリアーとか、そういう興味は湧かなかったなあ。西嶋さんとマリンさんはどんな楽しみ方をしたの？

西　嶋　マリンさんは、「君のぞ」でギャルゲーデビューだったということですが、やってみてどんな感じでハマりましか？

マリン　そうですね。僕はベタにゲームを楽しみました。たぶん、日本のご婦人方が冬ソナにはまったような感じだと思います。ヨン様萌えが水月萌えに変わったようなものです。蛇足ですが、三角関係というのは「冬ソナ」も同じです。

西　嶋　冬ソナは、「君のぞ」をパクったんじゃないか、ってウィキペディアの記事に出てたよ（笑）　マリンさんも水月にハマって、ほとんどそのシナリオしかやってないんでよね？　えっと、私の場合は、とにかく「遙」でしたね。まず、だって、いきなりアレですよ。第一章でちょっと甘酸っぱい普通のギャルゲーをさせといて、ネタバレですが、いきなり交通事故。呆然としましたよ。呆然としながら、ランブリングハートがかかって、それで数年後、水月とつきあってる描写にいくわけですが、もうなんか何も頭に入ってこなくて（笑。それで、「遙が意識を取り戻した」って時には、もう主人公と同じテンションでしたよ。個人的にはだから、もう私にとっての「君のぞ」は遙を幸せにするゲームって感じでしたね。でも、私はシナリオを網羅していくのが好きなので、水月や天川さんのシナリオでもぼろぼろ泣きましたし、あとは、いろいろイワクツキのマナのシナリオもよかったかな。私はキャラの魅力とかを掘り下げてくれるだらだらとした日常描写も好きですし、あとは「君のぞ」にはあんまりないですがＳＦ設定や燃える展開、またなにかしらのトリックが暴かれていくのも好きなんで、誰かのシナリオだけやってそのゲーム終わるっていうことはしませんね。必ず、全シナリオやりとげます。

深　津　マリンさん、水月萌えってのは、どういうこと？　ストーリーとは関係なく、水月のキャラが好きってこと？　オレが水月エンド以外考えられないのは、ストーリ

ーの展開からいってそれしかないだろう…って感じなんだけど。その辺はどうですか？

マリン　僕は西嶋とは逆で、とにかく水月でしたね。西嶋はシナリオ重視なので、全シナリオを見ないと気が済まないようですが、僕はキャラ重視なんで、気に入ったキャラのシナリオをクリアーすればそれで必要にして十分なんですね。あと、特定のキャラにあまりに感情移入すると、そのキャラ以外のシナリオでは他の女の子と付き合うことになり、そのお気に入りキャラを振らなきゃならなくなるので、それがイヤで他のシナリオをやらなかったこともあります。「君のぞ」はそうでしたね。水月にもろハマリでしたから。僕の水月好きはストーリーとは関係ないです苦笑

西　嶋　深津→物語の整合性　マリン→キャラ　西嶋→物語の全体　って感じの楽しみ方なわけですね。

マリン　西嶋ナイスまとめ！

二、キャラ萌えのメカニズム

深　津　とりあえず、西嶋さんのまとめでいいよね。で、オレなんかはやっぱすごく近代的な感じがするかなぁ。で、マリンさんがポスト・モダン？　西嶋さんの位置がちょっと微妙だけど。どう言語化すればいいんだろう？

西　嶋　私はなんなんだろう。結構、ポストモダンとかの狭間で懊悩してるっぽいんだけど。深津さんのストーリーの整合性って話だけど、それは実は「君のぞ」に特有の現象かもしれないですね。これは、まず水月シナリオありきで作っている感はあるんで。でも、他のギャルゲーとかは、本当にヒロインが並列に並べられてる、「先輩」や「後輩」、「眼鏡っ娘」に「妹」とかですね。それらはバリエーションでしかなかったりする。商品を陳列してどれでもお気に入りのものを好きなだけお取りくださいって感じの。あとは、それぞれのヒロインのシナリオをやることで物語全体の構造が浮かび上がってくるっていうのも結構あります。最近はそっちのほうが主流かな。まぁ、どの要素もごちゃまぜにしながらやってるのがギャルゲーなんで単純化しては語れませんが、全キャラクリアっていうのは割りと一般的な楽しみ方だと思うんですよ

深　津　なるほどね。「君のぞ」って、言ってみれば超越的な審級があるわけね。だから、ヒロインが実は等価じゃない。でも、他のギャルゲーでは、ヒロインは皆等価なわけだ。

マリン　多くのエロゲーのキャラクターが皆等価とは、言い切れないと思います。メインヒロインというのは、どのゲームにもいるわけですし。ただ、その中でも君のぞが、かなり水月重視だったことは間違いありません。

西　嶋　ん～、だからある意味で、「動物」的に全シナリオをクリアしてしまうんですよね。買った商品だから隅々まで網羅したい。そして、キャラやシナリオの魅力を多方向から知りたいって感じです。そういう意味でいったら、マリンさんは半ポストモダンなんじゃないかな。キャラっていうものに、フェティッシュを持ってはいるけど、それの整合性とかは気にするわけでしょ？なんつーか原作至上主義じゃないけど、絵描きさんを気にしたりして。フィギュアとか絵の整合性を気にしてる。でも、私は、どんなに造詣とかストーリーとかが崩れて立って、受容できると思いますもん。キャラの魅力にも行くので、同人誌とか割と読めますし、でもどちらかというとエロより、非エロのアンソロジーコミックとかのほうがいいんだよな。シリアスなゲームの４コマとか、もうキャラだけ使って、別の話にしてますから。でも、それも楽しめる。だからと言って、特定のキャラをとことん好きになるわけでもなく、なんとなく消費し

ちゃうし、シナリオがいいやつはやっぱりおもしろい。でもそれは、「キャラ」も「シナリオ」もなんか並列になって楽しんでる感覚はありますね。「キャラ」と「シナリオ」が交換可能な感じがしますから。それは、近代文学にはない現象ですよね。

深　津　「買った商品だから隅々まで網羅したい」っていうのは、近代的な疎外理論とどう違うのかな？　全体（性）への欲望が主体を更新するというのは、まさに近代的主体であるような気もするけど…

西　嶋　全体性とは、ちょっと違うんじゃないかな。なんとゆうか、他のシナリオも同人誌的に楽しめるんですよね。近代っていうのは全体を全て把握して見渡せる特権的なポジションをみつけようとするわけですが、私（たち）は最初っからそこは諦めてる。それは、むしろ、より多面的な、より自分にとって居心地のよいキャラ像を追い求めて、「萌え」の空間を彷徨うわけですよ。原作と全然キャラが違くなって展開する例もあります。「エヴァ」の綾波レイとかも、ＴＶ版の最終話に出てきたやたら明るいレイが同人誌とかに多用されてましたし、現在ではそのゲームも出てますしね。東浩紀の言う、データベースにアクセスしようとする「横滑り的消費」なのかもしれませんが、ある程度いろんなジャンルに手を出して、それぞれの趣味＝「萌え」を見つけて、自閉するっていう感じじゃないですかね。つまり、「全体」を見渡せる場所を探すのではなく、「私」にとって居心地のよい場所をデータベースの中から見つける作業なんですね。おそらく。

深　津　マリンさんの欲望が、半ポストモダンというのは、言われてみれば何となく分かる気もする。キャラの統一性というか、そういうものを前提にしているわけだからね。で、その場合のキャラなんだけど、マリンさんは水月のどこに萌えるんだろ？　青い髪とか、ショートカットとか、そういう部分（いわゆるデータベース）なの？　それとも、物語の中から浮かびあがる人物像（内面みたいなもの）なの？

マリン　そうですね。いくつか引かれる要因はあります。まず、造形ですね。ショートカットでスタイルがよくて…。次はキャラ設定。姉御気質で面倒見がよい、勉強も出来る、料理も作れる。あとは、ストーリーとの整合性です。シリアスなストーリーの中で、しっかりものの水月が、堕落していく様子などがリアルで惹かれましたね。最後の整合性というのは、先生のいわれる「人物像」とも関係しているかもしれません。

深　津　うん、けっこう近代文学的なんで安心しました（笑）。で、西嶋さんに話を戻すと、「私」にとって居心地のよい場所を見つける……みたいな感じの発言は、じゃあ、「他者」はどこにいるの？　みたいなオヤジの説教風な疑問を引き寄せるよね。恋愛（ゲーム）という、他者との関係性を主題にしているようで、じつは他者に出会わないよう、自閉に耽溺するっていう構造は、じつはエロゲーの専売特許でなくて、（村上春樹とか）近代文学の主題でもあるわけだけど。でも近代文学の場合、他者に出会わないのは駄目だ、みたいな批判は、その作品にとってけっこう致命的だったりする。では、「萌え」の空間を漂うというあり方に対して、同じ批判は有効なの？

西　嶋　ある意味では有効だと思いますよ。でも、同じ作品でも重層的に楽しむのが普通ですね。「鬱ゲー」と題されるごとく、みんなとりあえず鬱になるくらいは「君のぞ」やって悩んだり、落ち込んだりして、「近代文学」的にも楽しんでるんですよ。それは、ストーリーの中で「他者」に出会ってるとでもいうのかな。逆に、「他者」に出会ってしまったからこそ、自分の中のバランスを保ちたくて、自らの心地よい空

間を追い求めるのかもしれませんね。それは、ある意味でキャラクターに対する責任感でもあるんですよ。ハッピーエンドにしてあげなくちゃって、思って。もちろん、物語を「他者」として自らにとって都合のいいように改変せずに受容することは重要だと思いますが、そんなことばかりしてたら疲れるじゃないですか。その「他者」に出会うような「いい作品」はもちろんあって、それなりにみんなちゃんと対峙してるんじゃないかと思うんです。でも、それはそれとして、キャラを楽しむっていうのがもう慣習として存在しているので、そういう楽しみ方もするって感じなのかな。

三、モダンとポストモダンと

深　津　ちょっと話が戻るんだけど、西嶋さんの言う、「近代っていうのは全体を全て把握して見渡せる特権的なポジションをみつけようとするわけですが、私（たち）は最初っからそこは諦めてる」っていう辺り、もう少し具体的に詰めるとどんな感じなの？　そして、（人文系ではない）マリンさんはそれについてどう考える？

西　嶋　近代文学で言えば、作者（超越的な審級）において、登場人物も話の展開も管理されてるわけですよね？　だからそこに出てくる登場人物とかが、その作品を離れて展開していくことは許されない。でも、現在のこの「ギャルゲー」っていうジャンルではそこが違うんですよ。例えば、「ファンディスク」というものが存在します。それはあるギャルゲーが出したゲームのパロディのような作品を同じ会社が出すというものです。それは同じゲームシステムを利用して開発費を抑えて、次回作へのつなぎにするという意図もありますが、ファンサービスの一環でもあります。ウェブサイトでの人気投票の結果で、ファンディスクのそれぞれのヒロインのシナリオ量がきまったりして、ある意味非常にインタラクティブな試みでもあります。ですが、このファンディスク、非常に面白いのは「君のぞ」の例。「君のぞ」のファンディスクは全部で三つあるんですが、その中の一つは、「君のぞ」の本編の第一章のやり直しです。そこでは、遙が事故に遭いません。普通の高校生活の中で、水月や遙と恋するわけです。タイトルも「君が望む第一章」です（ttp://www.age-soft.co.jp/Product/Kiminozofd/index.html）。しかし、これはそもそも「君のぞ」を作品としてみた場合の、その作品のアイデンティティの根幹を自ら壊しているわけです。「君のぞ」といえば、最初に付き合ったヒロインが事故に遭ってしまう、というのが作品のアイデンティティというか、大前提なわけです。それを取り払って、そのような「ファンディスク」を作ってしまうところが、まさにデータベース的消費を皆がしているということだと思います。しかし、じゃあ、ただ単純に私（たち）が「動物」してるかというと違うと思うんですよ。例えば、先ほどのファンディスクの表紙ですが、遙の後姿なんですね。これ、何かっていうと、遙があの日のデートで駅で主人公を待ってるところなんです。本編では、この後、交通事故に遭ってしまい、三年間意識が戻らない状態になってしまうわけですが、この「君が望む第一章」では、遙は事故に遭いません。あの日に主人公が見ることができなかった、背中がこれなんですね。私なんかこの背中を見るとつい鳥肌が立って、目頭が熱くなります（笑）。じゃあ、その遙の背中を見て、感動してる私っていうのは何かっていうと、主人公の裕之ではないわけです。だって裕之は、その物語世界においては、遙が事故に遭うなんて微塵も思ってないし、事故に遭って水月と付き合って非常に微妙な三角関係に陥るとも思ってもいない。じゃあ、その遙の背中を見て感動してるのは、異なるシナリオ（可能性世界、パラレルワール

ド）を行き来しているプレイヤーでしかありえないんです。それで、そのパラレルワールドを行き来するプレイヤーっていうのに焦点をおいて、物語を構築しているギャルゲーっていうのがやっぱ出てるんですよ。ループモノっていうのかな。主人公がある期間の日常を繰り返すというか。私が以前論じた「ガンパレ」っていうのは、そこに繋がるんですよ。ループをしながら、ヒロインたちと付き合って、そのループを脱却する、あるいはバッドエンドを終わらせる糸口を探す。それはまさにプレイヤーの行為なんです。「事故に遭わなかった遙の背中」に感動する私っていうのを、なんとかストーリーの整合性の中に回復しようという動きなのかもしれません、それは。でも、その時に使ったループというロジックは、その結末だけが、唯一の結末ではなく、無限の結末がありうることを示唆している。それは、二次創作活動やその受容の肯定でもある。そして、それこそが、「近代的欲望」をポストモダン的な仕方で処理した結果なのではないか、と思うんですがどうでしょうか。

深　津　ということは、（何かトラウマ的出来事、たとえばソ連の崩壊とか（笑）、によって）全体性の把握を諦めた、という言い方ではなく、諸々の（テクノロジー的）条件が整ったことで、近代の「呪縛」から解き放たれた、っていうニュアンスなのかな？

西　嶋　あ、それで、深津さんへの回答ですが、私は「エヴァ」に大きな物語を見出そうとして、近代的な読み方をしようとして、完全敗北したというトラウマから出発しているので、諦めっていうのもあると思います。しかし、もはや「大きな物語」なんてない、いやなくていいんだ、みたいな現象として「萌え」を理解するのであれば、それはもう大きな前提になってしまっている気がするんですよ。それで、私とその人たちとの出発点は違うかもしれませんが、同じものを志向してて、それが「ポストモダン」の近代的読解。本来は繋がらない小さな物語を、繋げる物語（ループ構造）を採用するわけですが、それはポストモダン的読解も排除していない。っていう感じですかね。なんだかんだ言って、「動物」とされる人々にも「内面」はあるのでそちらへのケアもたまには必要かな、という感じですが。

深　津　学問として、ある種、未完の近代を追いかけているマリンさんはどうですか？ 学問として、っていうか、政治的実践として、っていうほうが適切かな？

マリン　未完の近代ですか。あんまり追いかけている気もしないんですが（笑）。そうですね。近代の側からポストモダンを批判するとき、一番槍玉に上げるのが「ニヒリズム」ですよね。イーグルトンなんかがその典型です。僕は、デリダとかを一生懸命読んでたから、ポストモダンが単なるニヒリズムではないことはよくわかっているつもりです。だけど、浅田彰なんかの近代に対する「抵抗」の方法はあんまり共感できませんね。逃げまくれっていうのはどうなのっていう。これは西嶋が詳しいと思いますが。

西　嶋　じゃあ、マリンさんがやってる社会科学の方法っていうのは、「何を」目指してるのかっていうのが個人的には気になるんだけど、そういう価値判断は一回おいておかれてるの？ そういう思考停止はポストモダンのニヒリズムと同じメンタリティのような気もするけど？

マリン　僕がポストモダンを評価するのは、やはり近代の欺瞞性を暴いたところですね。そんな正義の味方みたいなことい ってるけど、実際のところどうなのよっていう態度が好きなんですね。そこには「逃げ」ではない、「抵抗」の作法があると思います。

なんかありきたりな擁護論になってしまいましたが。

学問は何かを目指しているという前提が、僕は人文的だと思います。社会科学者って（特に社会工学に近い人たちは）、社会を良くしてやろうって気持ち、あまり強くと思うんです。とりあえず、ダメシステムを改善しようっていう程度の気持ちで、色々な研究をしているんじゃないかな。それが近代的といえばそれまでですが、なんか近代のロマンティズムとは別のものだと思います。

深　津　テクノクラートは信じられないよね、…だから人文系が大事なんだよ、っていうのもまぁ、近代のロマンチシズムなのかもしれないけどね。

西　嶋　テクノロジーへのフェティッシュになってるのね。それは「萌え」じゃない？歴史学とかで言えば、全体性とかもうどうでもよくて、とりあえず個別の実証主義研究やるってスタンスなんだろうな。堅実な気もするけど、それって結局、「候文萌え～」とか、「炭素測定法萌え～」とか、「常民萌え～」って言ってるのと同じだもんね。だからと言って、今全体性を回復しよう、な～んていったら、もう「ウヨ（右翼）」とか、「サヨ（左翼）」としか言われないじゃないですか。そのあたりの現状ってどう打開するか、っていう問いは無効なんですかね。

深　津　無効じゃなくて、その問いをどう問うかに学問の今後はかかってるとは思う。

西　嶋　もう、なんていうか、そういうある種いろいろな事象を「トリビア」として受容することが普通になっちゃって、実証主義も左翼も右翼もみ～んな並列の情報として受容されちゃう。だからといって、そういう全体性を持たないまま育ってしまった人は、コロッと新興宗教に目覚めたり、ナショナリスティックになったり、あるいは運動こそが生きがいっていう風になっちゃうんだよなぁ。

四、「萌え」の内閉性

深　津　後であらためてマリンさんのまとまった問題提起があると思うんだけど、そのまえに、ここまでの議論を踏まえ、いまのところの関心の所在を整理しておきます。西嶋さんのまとめにしたがえば、「「私」にとって居心地のよい場所をデータベースの中から見つける作業」イコール「萌え」である、と。「萌え」というのが、そんなふうに、他者性（自己を脅かすもの）を排除した居心地のよい空間への内閉であるのなら、そのことをどう評価できるのか。現実世界…って言葉が適切かどうか分からないけど、かつて、現実世界において他者は「外部」からやってきた。核戦争とか、「恐怖の大王」（笑）とかね。イメージとしては、国民国家間（東西両陣営）の最終戦争だよね。でもいまは、他者は「内部」に潜んでいる。オウムによる「テロ攻撃」が先鞭をつけたわけけど、いま、ふつうに電車に乗ってても「テロ特別警戒中」＝「戦時下」でしょ？　いつも。で、そんなふうになると、もはや「内部」／「外部」って境界線が失効してる、としか言いようがない。このイメージは、シトっていう他者が、外からやってくるものでなくなって、内だと思っていたものの中に潜んでた、っていう「エヴァンゲリオン」の世界観によく表れているんじゃないか？で、話をもどすと、こういう現実に対して、「萌え」の内閉っていうのが、どういう位置を占めるんだろう…？　っていう素朴な疑問がある。左翼オヤジ的な見方をすれば、それは現実の否認であり、「お前らが現実から退いてるあいだに世の中どんどん悪くなるじゃないか」…みたいな憤りって、きっとあると思う。けっきょく、保守勢力との野合じゃん、みたいな。そのあたりって、どうなんだろう。左翼オヤジ的な語りと違う語り方って

あるんだろうか？　そのあたりについて、二人の意見が聞きたいなぁ、と思います。

西　嶋　深津さんの問いに応答するところから始めたいと思います。とりあえず私の言葉で展開しますね。例のセカイ系の図式「きみとぼく（想像界）―社会（象徴界）―世界（現実界）」で、言えば右翼のおっちゃんも左翼のオヤジも、このうち社会を重視しています。右なら「国家」のために、左なら「弱者」のために戦うことを人々に要請するわけです。それはかつて「大きな物語」と呼ばれたものでしょう。そんな図式の中に、「大きな物語」に回収されずに、「終わりなき日常を生きろ」といった宮台真司がいます。今ではこの論を撤回（？）しているようですが、私はまだこの「終わりなき日常を生きる」というスタンス、かつて「大きな物語」に人生を捧げていった人たちへのアンチテーゼには、一定の説得力があるとおもっています。とりあえず、「きみとぼく」、あるいは「萌え」から始めることもありじゃないかな、と思いまして。つまり、物凄く身近な関係や、あるいは自分の趣味というところから、まず「社会」について考えていくっていう至極真っ当な（？）意見ですね。現在のところは、「きみとぼく」から「世界」へ直接アクセスしてしまっていますが、徐々にその隙間を埋めていきたいです。例えば、オタクであるならば、自分の趣味に没頭し、内閉したところで、そこで自らの立場というか利害に即して物事が見えてくると思うんですよ。岡田斗司夫が『オタク学入門』で触れていますが、ゲーム好きの小学生が、ゲーム誌などを通じてゲーム会社の株式や人事などを話すようになってくる。それは、自分の利益に直結する非常に身近なもの（ゲームソフト）が、その背後にある社会的関係（ゲーム会社の経営状況）と繋がってるのがみえてくるからなんですよね。そーゆー自分の利害に関わったり、自分の興味関心に直結する問題については、私は人はそうそう「変な」解答はしないと思うんです（これは私には似つかわしくない（？）人間主義的な考えですが）。それに「萌え」は、あらゆるものを、フラットに並置していく作用があると思うんです。複雑な政治も、またＳＦ設定に代わる新たな材料として、あるいは「萌え単」的なハウツー本としての、オタク（に代表される（？）現在の人々）の政治参加の可能性を模索したいですね。党派ではなく、あくまで個人レベルから、言ってしまえばなんのことはない主張かもしれませんけどね。あと、これって実はすごく「近代」的な、個人主義、民主主義的考えかもしれませんが、でも、とりあえず考えてるのはそんな感じですね。自閉は「個人」を明確にするための出発点として位置づけられないでしょうか。そして、その個人的生活を支えるインフラの非自明性について、訴えていければ、個人からの政治参加って不可能でしょうか。

深　津　西嶋さんのレスを読むと、やっぱり「近代人」（外見は縄文人だけどね…笑）だなぁ、という気がする。個をつきつめた果てに「公」に通じる、ってのはまさしく近代文学のパラダイムだしね。西嶋さんはそのように「外」を見据えた「内」閉ができるとして、でも、「萌え」のマジョリティに「内」「外」（という意識）があるのか？　っていう疑問も実はある。たぶん、なんのかのと言って、ここに集まってるメンバーはかなり「公」を意識してる気がするので、この問題はこれ以上つきつめられないかもしれないけど。ただ、「萌え」の人々は、「公」を意識しないぶん、（「誤った」）「公」に「動員」されないんじゃないか…、って希望的観測をする人もいるよね。なんかほんと、希望的観測に過ぎない気がするけど（笑）

西　嶋　これが、希望的観測だということ

はもちろん、そう思います。「客観」や「科学」を謳う様々なものが、イデオロギー性にいとも簡単に回収されていったのは周知の事実ですから。でも、「萌え」を支える生活のインフラや趣味世界の背後にあるものの問題から、「公」につながらないかなーと思うわけです。やっぱ「近代」だなぁ。でも、ホントに突き詰めれば、絶対アニメやゲームって会社で作ってる以上、経済、ひいては政治の話になると思うんだけどなぁ。

五、恋愛の不可能性について

マリン　恋愛における他者問題ってとても重要ですよね。この前の鼎談を受けて、大澤真幸の『恋愛の不可能性について』（ちくま学芸文庫）を読みました。これ、恋愛における他者問題にわかりやすくアプローチしてると思いました。先生は読んでますか？

深　津　いや、読んでないと思う。どんな感じなの？

マリン　先生が指摘された「萌えの内閉性」という問題は非常に重要だと思います。僕が考えるに、恋愛って、恋人との完全なシンクロ、一心同体になることを志向するものだと思うんです。

深　津　なるほど…。これは面白いテーマになりそうだね。っていうことは、ある種の共同性を志向してるわけ？　オレは逆に、柄谷やヴィトゲンシュタインのいう（で、いいのかな？）、命がけの飛躍みたいなのが、恋愛イメージなんだけどね。つまり、シンクロするか、どうかは分からない。けど、跳ぶ…っていうプロセスだね。シンクロすることを前提にしちゃうと、ちょっとニュアンスがズレる気がする。

マリン　簡単にまとめますと、文学テクストを手がかりに、恋愛の究極目的は恋愛の成就ではなく、破局であると。こういう論理展開で論を進めてます。

深　津　ある種のコミュニケーションの非対称性を前提にしなきゃいけないと思う。「郵便空間」って、言ってもいいのかもしれないけど。

マリン　その通りだと思います。恋愛は恋人は完全なシンクロを志向するが、それは絶対に不可能。これが「郵便空間」をもとにした恋愛観だと思います。『恋愛の不可能性について』もこれと同じ問題意識を共有しています。この問題意識をもとに大澤は、文学テクストに「真の愛＝破局」という構造を見出し、それが恋愛の不可能性（これをコミュニケーションの不可能性と言い換えてもよいでしょう）を象徴していると述べます。

深　津　で、そういう感じで論を飛躍（展開）させると、いわゆるギャルゲーの恋愛って、そういう意味でのコミュニケーションの非対称性、つまり他者、あるいは幽霊と出会ってしまうかもしれない可能性ってのが、極力排除された空間なの？　その辺はどう？

西　嶋　ギャルゲー一般とするには、結構無理があるかと思います。文学はその他者の問題をどう扱ってるんでしょうか。文学が扱ってる程度には、ギャルゲーも扱ってるソフトがあるにはあるという感じだと思います。

マリン　その傾向はあると思いますが、それは作品によって異なると思います。西嶋さんに同感ですね。「君のぞ」などは、それに配慮してるほうだと思います。だよね？

西　嶋　「萌え」系というか、シナリオ重視ではなくて、キャラ重視のやつなら、他者が出てこないっていうのはその通りでしょうね。主人公は決して否定されないし、ぬるま湯で女の子といちゃいちゃするのを楽しむゲームですから。でも、それはそーゆうソフトだから、「癒し」にはなるよね、っていう見解かな。でも、シナリオ系なら、

「文学」をやろーとしてるやつもあるんで、その程度には「他者」と遭うんじゃないでしょうか。

深　津　近代文学はむしろ、コミュニケーションの対称性幻想が根深いよね。だから恋愛小説と銘打っても、じつは恋愛じゃない（笑）　もちろん、対称性幻想にしがみつきながら、他者に出会っちゃって破綻してるテキストもあるんだろうけど…。そういう意味で、つまり玉石混交があるという意味で、近代文学もギャルゲーも一緒だね、…って言ってしまえば、これ以上問題を掘り下げることができなくなっちゃうんだけどね（苦笑）　でも「君のぞ」も、案外他者がいないんじゃないか、って気もしなくはない。これはもう、女性がこのゲームをしてどう思うか、ってことになっちゃうんだけどね。なんか、オレも水月エンドの筋でいくつか泣かされたんだけど、こんなオッサンが心地よく泣けちゃうってとこに、やっぱ問題がある気はするんだよね。女性がいない以上、これ以上問題を深められないけどさ。近代文学には、フェミニストがいて、その観点から批評する人もいる。でも、ギャルゲーはそういう批評をくぐってないぶん、少し弱い気もする。そういえば、東浩紀が小谷真理にいじめられたことがあったね。

西　嶋　パッケージングされた商品ですからね。「君のぞ」に関しては、プレイヤーが鬱になる程度には内面に訴えかけてくるものだと思います。でも、そんな商品を装いながら、そこからはみでようとしてるものはあると思います。それはＫｅｙっていう会社の作品だと思います。深津さんに貸した「Ａｉｒ」っていうのも今度やってみてくださいね。ギャルゲーに関しては、フェミニスト批評がそこまで有効じゃないんじゃないかとも私は思います。フェミニスト批評っていうのは、言ってみれば、「現実の女」から男性社会の産物を批判する視点じゃないですか。でも、ギャルゲーってなんてゆーか、最近は、「仮想の美少女」と真剣に向き合い始めてるような気がするんですよね。「現実の女」とは繋がらない、自分たちがフェティッシュを持ってしまったこの「美少女」をどう扱い、どのように接していくのか。それは、「現実の女」の問題の延長として語られるのではなく、独立した「仮想の美少女」という他者に対する向き合い方のような気がします。東が同人誌『美少女ゲームの臨界点』で取り上げている作品はそういうのが多いと思います。そーゆー意味で言えば、「仮想の美少女」と「現実の女」を同一化してしまう、フェミニズム批評こそ、「他者」をみてないんじゃないか、という気もします。

深　津　「「仮想の美少女」という他者」という用語がよくわからないなぁ。もう少し説明してもらえる。だってそれは「我々」が創り上げた心地よいイメージなんじゃないの？

西　嶋　ん～、ちょっと違うような気がするんですよね。もちろん、心地よいイメージを追及してきたってゆうのはありますし、実際そうでしょう。「ご主人様」や「お兄ちゃん」なんてプレイヤーに言ってしまう、まぁ、軽薄なキャラクターは、慰み者でしかないのかもしれません。しかし、そうは言っても、彼女らは二次元であり、こちらからの問いかけにも答えられず、それこそシンクロできないんです。でも、そういうものに対して、フェティッシュを抱き、「現実の女」以上に、というかそれとはまた違った回路で、執着してしまってる人たちがいるわけです。じゃあ、そのときに、その彼らが抱いてしまった愛着の先、「仮想の美少女」ってなんなんだ、っていう自己言及が、シナリオ系のギャルゲーではなされるわけです。それは、必ずしも心地よいエンディングじゃないですよ。とりあえず、

やってみて、としかいえませんが。ピグマリオンやドン・キホーテの「妄想」は、本人とってだけ都合のいい世界だったんですかね。その世界が、自立的に稼動して、「他者」として彼らに襲い掛かってくることはなかったんでしょうか。「美少女」の例でいけば、斎藤環『戦闘美少女の精神分析』でとりあげた、ヘンリー・ダーガーの作品を例に挙げてもいいですが。

深　津　でも、西嶋さんのレスを読むと、結局自己言及で完結してるじゃん、って気もしなくない。もちろん、そういう内省って嫌いじゃないけど。でもやっぱり、それは自己愛的だよね。あとひとつ単純な感想として…。ギャルゲーして、「仮想の美少女」に「萌え」ってる男子たちも、「現実の女」と接しないわけはないじゃない？…たぶん。仮想世界に禁欲できない（笑）マジョリティーの男子たちは…。そこのところ、彼らは現実の他者とどう折り合いをつけるんだろう？　っていう疑問は、ゲームと現実の見境がつかなくなって人殺しちゃう奴がいる…みたいな短絡ではないんだけど。そのへんは、割り切って付き合えるんだろうね、きっと。これが最近流行の「解離ってやつなのか？　って、これも、西嶋さんやマリンさんに聞いても仕方ないんだけど…（笑）。

西　嶋　ん～、じゃあ、現実の恋愛は、本当に「他者」と触れ合ってるの？　自己言及で完結してるんじゃないの？　ってゆう気もしますけどね。ボヴァリー夫人じゃないのか。そこに「他者」との交渉をみなきゃ、文学はやってられないのかもしれないけど。でも、自分の中にも「他者」はいるわけで。ああー、なんかもうごちゃごちゃしてきた。

深　津　最初に戻ると、コミュニケーションの対称性って幻想のうえに恋愛（という制度）は成立している。でも、「現実の女」（もちろん、「現実の男」も）はこっちの思い通りにならない。いろいろ裏切ってくれる。それと、ゲームのキャラクターは、やっぱり決定的に違う気がするけどね。あと、自分の中の他者、という話はたしかに分かる。ただ、自分の中の他者に気付かせてくれるのは、やっぱり、想定外の他者（＝現実の他者）ではないかな。結局、自己内対話（自己言及）のループは自己を抜け出せないのではないか?　リクツで言えば、西嶋さんの言うようにゲームも現実の一緒かもしれないけど、やっぱ、現実は偶然性に溢れていると思うんだ。でもまぁ、これ以上は水掛け論になっちゃうかな?

西　嶋　私は決して「現実の女」に対して否定的ではないですよ。まぁ、肯定的っていうのも変ですが。。。ただ、「仮想の美少女」についての扱いが、ちと不当なような気がして、擁護したわけです。「偶然性」とゆーと、まぁ、じゃあ、その度合いの問題なのか、とも思いますが。それは、より技術が進んで、いろいろ動作できるようになって、ファジー回路がつけられれば表面上は乗り越えられるんだと思うんだけどな。押井守「イノセンス」の現実を上回るような情報量みたいな感じで。でも、それでも、「現実」の「他者性」にこだわるのっていうのは、ある種の幻想じゃないかなーとも思う。水掛け論かなぁ。

六、ネオコンとネオリベの定義

マリン　では、ここでテーマをガラッと変えて、保守主義の議論を始めたいと思います。まず私が考えているのは、現在「保守」の一派とされているネオ・リベラリズムについてもう一度きちっとした考察を行いたいと思っているのです。二人の中のネオリベラリズムのイメージとはどのようなものですか。規制緩和や民営化といったところが結びつきやすいでしょうか。

西　嶋　政策で言えばそうだよね。「小さな政府」をつきつめる感じ？　あとは、す

っごい個人主義で、地縁的じゃなくてみんなそれぞれのリズムで動いてる感じ。オンデマンドとか、ネットとかのイメージも入るかなー。あー、あと格差社会ＯＫ！っていうスタンス。なんでも、自己責任。

深　津　ほぼ西嶋さんと同じですね。もともとはアメリカ出自なんだろうけど。日本だと誰だろう？なんか自民党と馴染まない気もするんだけど。まぁ、ぶっ壊された（？）からいいのかな。

マリン　深津先生のおっしゃるとおり、ネオリベはアメリカ出自です。そこで、佐々木毅の『アメリカの保守とリベラル』（講談社学術文庫）を手がかりにちょっと勉強してきました！　僕は、「ネオリベラリズム＝政策主義・社会工学主義」だと考えています。科学主義にも近いかもしれません。そこには思想性はほとんどない。西嶋さんのイメージする格差社会ＯＫ！や自己責任というところは、厳密に定義するとネオリベラリズムとはあまり関係ないといってよいと思います。この二つはどちらかというと、ネオコンサーバティヴにつながると思います。

西　嶋　ん～、じゃあ、とりあえず、ネオリベの定義と具体例を言ってもらわないとみえてこないかなー。ネオコンとの差異も説明してくれると助かります。前提を共有しないと議論もできないと思うので、お手数ですが、よろしくお願いします。

深　津　自己責任っていう主体すら相手にしてないのね？　その社会工学主義は…。ここでいう主体ってのは、内面を持った近代的主体のことだけど。

マリン　では、西嶋さんに従って、ネオコンサーバティヴを定義してみたいと思います。やっぱりネオコンの総本山といえば、アメリカです。その源流は、一九二〇年代の反スターリン主義を掲げるトロツキストたちのグループでした。このグループは、第二次大戦後、民主党内の極左グループとして活動していましたが、その後国内情勢と歩調を合わせるように保守化し、一九七〇年代に分解しました。そのため、現在のネオコンにはトロツキズムの片鱗は全く見られません。では一九二〇年代のトロツキストグループと現在のネオコンとの共通点はどこにあるのか。一つ挙げられるのは、プロユダヤ的な傾向を持っているということです。トロツキストグループは、ユダヤ人差別が現在よりも強かった第二次大戦前のアメリカで、ユダヤ人の保護やグループへの勧誘を行っていました。これが、現在のネオコンのイスラエル寄りの中東政策につながっています。もう一つには、反スターリン主義があります。トロツキーはソ連に対して比較的ポジティブなスタンスをとっていましたが、後にネオコンへと「転向」する米国のトロツキスト達はスターリンが統治するソ連が大嫌いだったんです。これが現在のネオコンの反共主義につながりました。一九八〇年代のレーガン政権は、反共主義を掲げ、チリ・ニカラグアといった当時の左翼政権に積極的な軍事介入を行いました。レーガンは海外の左翼政権に対する軍事介入に対して、チリのピノチェトやフィリピンのマルコスといった独裁政権も、反共であるという一点において支持したのです。ざっとこんな感じで、ネオコンの起源から現在のネオコンまでの繋がりを説明したわけですが、疑問点などはありますか？

深　津　西嶋さんはどう？　なければ、ネオコン＝近代主体を問題にし、ネオリベ＝近代主体を相手にしない…という図式について、これでいいのかどうか、説明して欲しいんだけど。でも、ここでの議論の目的は定義の厳密性ではなく、図式でどこまで世界を切り取れるか、ってとこにある気もするから…

西　嶋　今のネオコンの説明だと、最初に

言ってた「格差社会ＯＫ！」とか「なんでも自己責任」とかっていう話が、なんで「ネオリベラリズム」じゃなくて、「ネオコンサバティブ」なのかっていうのがわかんないかな。厳密性というか、マリンさんの言う、ネオコンとネオリベのイメージをもうちょっとつかんでおきたいんですが。読者もこれじゃ、二つの違いがよくわからないし、イメージできないとこれからの話も理解できないと思うんですが。。。

マリン　確かに（笑）ではもう少し説明します！格差社会ＯＫ！や自己責任論の源泉は保守主義の経済的自由主義にあります。先ほどは、それをより先鋭化させたという意味で、ネオコンサーバティブという言葉を使いました。

西　嶋　経済的自由主義っていうのは、アダム・スミスとかの古典的自由主義のこと？　だったら、やっぱりネオリベのほうに繋がってるんじゃないの？

深　津　アメリカの「リベラリズム」って、いわゆる古典的自由主義じゃないんだよね。日本でいうと、むしろ「左」なんだけど、それが反共なんでしょ？　そのあたりは理解できると思うけど。それが「にもかかわず」反共…だね。もうちょっと言葉を詰めると。ニューディールとか、保護主義的な政策を進めてきたのも民主党だしね。アメリカの「リベラル」って、ヨーロッパで言う「リベラル（自由主義）」とは違うんだよね。

マリン　この辺りは錯綜しているんですよね。これにはネオリベラリズムの定義を説明させてもらうことで、答えたいと思います。先ほど、ネオリベラリズムは年代に民主党内から生まれたと述べました。当時、リベラル陣営はレーガン政権によるネオコンサーバティヴの攻勢を受け、苦しい立場にいました。このような状況下で、民主党内の一部若手グループが、もう一度リベラルに求心力を持たせるためには、現在のリベラルのままではダメだと考え、保守主義やリベラルのイデオロギー偏重の政策から、シフトしようと考えたのです。これは、理想主義から現実主義へのシフトとも言えると思います。例えば、リベラルだからといってなんとしても労働組合と歩調を合わせなくてはいけないのか。あるいは、ケインズ主義を引きずり、莫大な財政赤字を抱えようとも公共投資を続けなくてはならないのか。初期のネオリベラリズムは、従来のリベラルに対してこう問うたのです。

深　津　で、現実主義へのシフトが（内面に働きかける）イデオロギーではなく、技術への偏重として現われた、ってことだよね。

マリン　その通りです！ネオリベラリズムは、当初、先端技術の重要性を強調するグループによって提唱されたため、「ハイテク・デモクラット」と呼ばれていたそうです。

深　津　西嶋さんはどう？　そろそろネオリベラリズムと自己責任の問題に入ってよいかな？　自己責任というのは、結局、個人（の内面）の問題でしょ？　イデオロギーだよね。でも、社会工学は、自己責任を問題にしない（問題にするのは、ネオコンなのだ）と言う（ネオコンはイデオロギーなのね。その意味で）。で、ここから連想したのが、東浩紀のいう「環境型権力」なの。つまり、マックに長居しちゃいけないよ、お店に迷惑かけるから、ってメッセージを、個人の良心（内面）に（イデオロギーとして）働きかけるのでなく、椅子を固くして、身体に直接働きかける。これぞ動物的！　良心（内面）云々じゃなく、ケツが痛くて長居できないみたいな…。そんなイメージを受けたの。で、そういう理解はどうなの？　っていうことなんだけど。

西　嶋　ほい、了解です。議論の筋道が見えてきた感じです。環境管理型権力ですね。

宮台は建築家的な権力、アーキテクチュラルな権力とか言ってましたが

マリン　そうですね。環境管理型権力はまさにネオリベラリズムの究極形だと思います。ネオリベが行くところまで行ってしまうと、恐らくここに行き着きますね…。この問題は、東が最近始めた「ギートステイト」というプロジェクトの主題にもなっています。西嶋は確かギーステのパンフレットを持ってたよね？　ギーステは二〇四五年の未来予測＆ＳＦエンターテイメントというおもしろいプロジェクトで、高度に情報化・システム化・管理化された近未来の日本が描かれています。東は現在のネオリベ的状況が継続すれば、日本の近未来はこうなるんだ！と主張しています。ちなみに参考ＵＲＬです↓

http//blog.japan.cnet.com/geetstate/a//post_.html　それで、今回はどうしたらネオリベ的政策を管理社会につなげないようにするかを一緒に考えて欲しいっす！

西　嶋　パンフってゆうか、同人誌だけどね。まだ読んでないよー。あと、環境管理を失ったネオリベって、なんか「骨抜き」って感じがするんだけど、そんなことありえるの？

マリン　なんかネオリベ＝環境管理っていうので凝り固まってるよなー。この前ネオリベを単なる政策主義って定義したじゃん。でも、その政策主義というのは単なる効率第一主義ではない。効率や合理性のためなら人の自由を制限しても良いという思想は、ネオリベラリズムには全くないんだよ。

七、イデオロギー？

西　嶋　その、環境管理の側面以外の、政策主義っていうのがイメージできないんだけど？　その説明はしてないよね？いや、そーゆう消極的な定義じゃなくて、積極的な定義や具体例をあげてもらわないと、イメージしにくいんだけど？その辺が、イメージできないと、マリンさんがそもそもなんでそんなにネオリベラリズムにこだわるのか（擁護するのか？）も見えてこないし。

深　津　いまのところは西嶋さんに同感。環境管理に行き着かない政策主義を考えようといっても、ちょっと想像できない。あと、ネオリベが行き着く未来はマリンさんにとって明るいの？　暗いの？　簡単でいいからまずその評価を聞かせてよ。ネオリベラリズムの政策が環境管理に行き着く可能性はマリンさんも認めてるわけでしょ。で、そこに行き着かせない可能性を考えましょう、っていわれたときに、ネオリベラリズムを何によって定義するかが見えないと議論できない。政策重視や現実重視って言われても、どの立場の人の観点からの政策や現実なのか、で変わってくるでしょ？　そのときに、ある種の理念（イデオロギー）抜きに政策って成り立たなくない？

マリン　明るい暗いという程度問題ではないと思います。管理社会は、リスクが少ないが息苦しいというのがぴったりですかね。僕は政策や現実を擁護するから、ネオリベにこだわっているんですよ。先ほどの説明では、ネオリベは現実主義だと言ったと思います。保守やリベラルがイデオロギーに偏重しており政策的現実主義を失っていることを問題化したのが、ネオリベラリズムなんです。それにしても、二人の意見だと政策＝環境管理ということになるんですか。それだと総合政策学部にいる僕は、潜在的環境管理推進勢力になってしまいますよー笑。

西　嶋　ん～、今までのマリンさんの話の展開を聞くとそうなるよ。逆に今のネオリベの定義だと、「非イデオロギー」を騙る「科学主義」って感じに映るなー。なんかうさんくさい。保守やリベラルがやってたよーな政策を「イデオロギー抜き」でやってみますよ、ってゆう立場なの？

マリン　ネオリベは分配よりも生産と成長

に経済政策の重点を置きます。サプライサイドエコノミックスではなく、経済成長型の政策にその特徴があります。

西　嶋　それってイデオロギーじゃないの？

深　津　成長って、イデオロギーでないの？

マリン　いやいや、社会科学のフレームでは経済成長促進型という単なる一政策ですよ。人文系から見たらこれもイデオロギーなんですか？　不思議です。リベラルの分配主義や保守主義の伝統主義に比べたら相対的にイデオロギー色は薄いことは明らかでしょう。

西　嶋　相対的に「イデオロギー色」が薄く見えるのは、絶対的にネオリベの歴史が薄いからじゃない？　ネオリベで動く国家が出てきたら、「イデオロギー色」は濃くなると思うよ。結局、リベラルや保守に対して特権的立場におけるだけの何かはないと思うけどな。

マリン　別に特権的立場をとりたいわけではないですよ。ただ、リベラルや保守は現実を曲解しているんじゃないかと思ったとき、もう一つ、よりニュートラルな立場があったほうが良いというだけです。イデオロギーから自由になって、この部分はリベラルがよいけど、この部分は保守が良いと言える人ってあんまり多くないと思うんです。なんかの発言をするといつもどっちかの陣営に入れられちゃうけど、本人にはそんな意図がないってことはよくあるんじゃないかな。蛇足ですが、そういうとき、ノンポリですって安易に言ってしまうのではなく、現実主義ですっていうとカッコ付くんじゃないかなとも思います。

深　津　「現実主義」の現実の切り取り方が問題だと思うんだけどね。話を戻すと、たとえばオレは経済成長バラ色だと思わない。そんで、ネオリベラリズムの政策を進める人から、そういう人とは話ができないと言われても、排除されてる、って分かるぶんまだいい（笑）　それってイデオロギーじゃん、って反発できるだけね。オレが環境管理型権力なるものに怖さを感じるのは、近代人として、そこに「抵抗」の契機を見出せない、から。環境工学って、イメージとして言えば、自分が排除されてるって気付かない。それはそれで幸せじゃん、って見方もあるかと思うけど。でも、なんか嫌だなぁ。あと、経済成長をアプリオリに前提するのは、共産主義（の世界観）とどう違うのだろうか？　共産主義も「科学」だったわけでしょ？

マリン　いやいや前提にするわけではありません。経済成長をさせるべく政策をデザインするだけです。

西　嶋　結局のところ、前提にしてると思うよ。エコロジー的観点から考えれば経済成長をしないというオルタナティブな選択肢だってありえるわけだしね。現状をどう保つかとか。ネオリベは、政策をあくまでデザインするだけ。それで価値判断は他人任せっていうんだったら、それはイデオロギーの使いっパシリってことになるけど、それでいいの？

マリン　でも、トレードオフの成長維持はありえませんから、結局は停滞か成長になると思います。

西　嶋　んじゃ、停滞で。

マリン　停滞でもいいというのは偽善っぽくてあんまり好きではありません。経済が悪くなると、世の中暗くなりますしね。自殺や倒産増えたり。もちろん景気よいときも自殺や倒産はありますが不況時よりは相対的に減るでしょう。単純化を恐れずに言えば、景気が良ければ、税金が増えて公共投資ができる。そうすれば公園ができるし、バリアフリーが整備される。社会保障関係費も増えるし、医療機関にも助成金が回る。これはあんまり悪いことではないと思う。

深津　なんか社会民主主義みたい（笑）マリンさんビジョンはどうもすごく近代的。でも、ポストモダンのテクノロジーってのが、政治の中でも問題になるのでは？そこを問題にしないと、社民主義（あるいは体制）と変わらないジャンって思っちゃう。そのテクノロジーが、排除されてることすら意識させない、ってところに行ったときに「環境管理型権力」の社会になるわけだし。ネオリベラリズムの政策と、そういったテクノロジーとの親和性、あるいは相反性といったところはどうなんだろう？　経済成長の是非は水掛け論にしかならないからさ。その辺を詰めれば、マリンさんが展望するな、「環境管理」に行き着かないネオリベラリズムの可能性が見える気もするんだけど、何かない？

西嶋　んじゃ、先進国だけど、無類の自殺好きの日本人はどうなんでしょう。他の先進国に比べて格段に自殺率が多いし、「幸せ」だと思うことが格段に低い。これは宮台真司あたりが言ってて、一日くれれば調べてくるけど、統計があって、けっこう発展途上国とかよりも「幸せ」度数が低い日本は、成長してもそんなかわらんと思うよ。今は、景気がよくなってるってゆーけど、それに実感がない人が多いのは、結局大企業の景気とかが回復してきたからでしょ。個人商店とかはあいかわらず厳しい。景気がよくなったって、個人商店はバシバシ倒産しつづけることだって、あるわけだ。

マリン　これを見てください。失業者数の増減と自殺者数の増減が強く関連していることが見て取れます。失業が自殺に直接結びついた場合と、経済的な困難一般が、失業にも自殺にも別々に結びついた場合とがあると考えられます。

http//www. ttcn. ne. jp/honkawa/. html

西嶋　それじゃ、こちらも水掛け論ですが、ソース持ってきますが、こちらは幸福度調査ってゆーやつで、マリンさんの論理から言えば、経済成長をすればするだけ幸せになる。じゃあ、先進国のほうが発展途上国よりも幸せになってしかるべきですが、現実は、日本はそうはなってない。先進国でない国でも日本より「幸せ」だと感じられる。だったら、そっちを問題にして自殺対策に行く方が私はいいと思うのですが。「経済成長」にこだわる現在のマリンさんは、非常にイデオロギッシュな感じがしますよ。

http//www. ttcn. ne. jp/~honkawa/. html

マリン　人々の「幸せ」って、「幸福度調査」なるもので量れるくらい陳腐なものなのでしょうか。僕は、人文系の人がこのような怪しげな調査を論証として持ち出すことに驚きを覚えます。そもそも、私は経済成長＝人々の幸せという議論は立てていませんし、経済成長はバラ色だとも思ってない。相対的に見て、停滞より成長がマシだろうと主張しているだけです。僕は自分のお給料じゃ食べていけなかったり、子どもを学校に行かせられなかったりという人が、停滞よりも成長することで少なくなるでしょってことを言いたいだけです。

西嶋　この「幸福度」の問題は、別に人文系だけの問題じゃなくて、社会学者の見田宗介が問題にしてるんだよね。宮台真司が、二〇〇五年九月二三日のブログに「アマルティア・センの言う「ケイパビリティ」を主題化せよ。見田宗介氏が八月一六日付『朝日新聞』で日本は経済水準が高いのに「とても幸せ」と答える割合が大層低いと指摘した。センによれば、経済が豊かでも幸せでないのはケイパビリティの乏しさ故だ。」っていうふうに言ってて、この前も同じこと言ってたし、これはたしかに「怪しげ」なんだけど、「経済」みたいに割と簡単に数値化できるジャンルばっかりに目が行っていたのが社会学の抱える問題だったと思うんだよね。数値化できないものに

対しても社会科学は問題としてなんとか扱っていかないとマズいんじゃないかな。マリンさんの話は数値化できないもの（＝幸福、あるいは生活？）を数値化できるもの（＝経済）でなんとかしようって考えだけど、そういう数値化できるものからのアプローチにも限界がある、っていう問題意識を見田や宮台は持ったんじゃないかな。社会学をずっとやってたからこそそういう問題意識を持ったんじゃないか、っていうのが私の意見。もちろん「陳腐」で「怪しげ」な統計調査は疑ってかからないといけないんだけどね。

七、セキュリティの保証をめぐって

マリン　先ほどの深津さんの質問に質問を返してしまうのですが、リベラルの側から環境管理に抗するときってどういう戦略をとるのでしょうか。

深　津　この質問は、「あるはずだ」。そこを考えよう、っていう提案。それとも、「そんなもんない」。あると思うならあげてみぃ、って感じ？

マリン　いやー、あるかないかは見当付かないですね。もちろん、良い案があれば即採用！って感じですが（笑）　これからの時代、自由を主張するには、セキュリティによる安心感をある程度諦めなきゃいけなくなると思うのですが、やはりリベラルは安全よりも自由だろうと主張していくのでしょうか。

深　津　安全でないかもしれない「外部」への想像力を許さない「安全」は要らない。それがオレの考えです。ある選択肢の中で、選べる安全ならオレもそれを選ぶ。もちろん、選択肢自体が与えられたものだと言われればそれまで。でも、選択肢の恣意性を想像できることも、重要。そんなスタンス。ともかく、今のテクノロジーは、（つきつめれば）安全でないかもしれない「外部」への想像力すら許さない気がするの。それは技術者の、「悪意」とか、「善意」とかの問題でないと思うけど。そういう「中立性」が、外部のない「安全」空間を作っちゃうところが現代のホラーだと思ってます。そこと、（価値判断をカッコに入れる）ネオリベラリズムとの間に、ちょっと親和性がありそうなところが危険かなぁ、とは思う。

西　嶋　ん～、どこが、「安全」を保証してくれるかってゆー話はないの？セコムのような資本なのか、それとも国家が管理するのか。はたまた、地域がそれを大体するのか…。地域っていっても、自警団のよーなもんばっかりじゃないくて、例えば商店街とかが活気があって地域のお祭りとかが盛んに行われていれば、治安ってそうそう悪くなるもんじゃないじゃない？　でもそのあたりを大規模店舗規正法の緩和とかでずるずる崩しちゃったから、現在の不安な状況があるってゆうことがあるから。このあたりは宮台の受け売りだけどね。そーゆう、やりかたもあると思うよ。深津さんが指摘されている「外部」の問題を扱うには、基本的にあんまり「手出し」をすることができないんですよねー。そんなかで、自分たちの「安全」を確保すんのは、難しい。深津さんの言う「外部」っていうのは付き合っていけるもんなんですかね。コミュニケーションを取れる？　むしろそれすら不可能な「外部」への想像力なんだろうな。でも、その「外部」を主眼においてしまうと、「地域」とかって崩壊しませんかね？

深　津　ここでいう「外部」は、べつに交通不能な「他者」という意味じゃないです。単純に、「安全」（安楽・安逸）でない状態、って意味です。

西　嶋　了解です。

マリン　西嶋さんが指摘された、誰がセキュリティを保障してくれるかという観点は非常に大事ですね。コミュニティによるセキュリティも大事だと思いますが、良いか

悪いかは別にして国民の多くが当てにしているのは国家による安全保障なのではないでしょうか。あと最近顕著なのが、自分の身は自分で守るというセキュリティ観ですね。子どもにＧＰＳ携帯を持たせたり、学校に監視カメラを付けるために親がカンパしたり、みたいな。

西　嶋　私は国民が自分の安全保障を国家に依存することが、まずいんじゃないかと思ってるんだ～（笑）　現在の日本はどんどん環境管理型権力のはびこる社会になってて、それを望んでるのが国民なんだけど、それってヤバイよ、って思ってる。その理由は深津さんといっしょ。

深　津　でもオレは逆で、国家って理念を語る近代の産物だから、その意味で案外、使えるんじゃないか、って思ってる。怖いのは、安全（安楽）を求める個人の欲望。民間のセキュリティとかのが、じつは怖い。欲望にダイレクトって部分で、どんどん技術革新するだろうし。そういうところをね、国家には規制してほしい（笑）　いや、まじで。

マリン　深津先生のおっしゃってることは抽象的ですが、強引に読み替えてしまえば、外部に対するリスクを負ってでも、外部を信頼せよということでしょうか。

深　津　それいいと思う。あぁ、自己責任のパラダイムだ（笑）　まぁ、なんだかんだ言ってオレはネオコンだ。

西　嶋　ネオコンはネオリベと親和的だと思ってたのに（笑）

深　津　この議論は、判断能力を持つ近代人を前提している（笑）　それが強者の論理であることは認めないとね。経済的に…というのはともかく、少なくとも言葉を持ってる、って意味で強者だよね。で、いま言葉をもってる、って状況を保守したいだけじゃん?…と、なんだか、自己言及のループに陥っている（笑）　でも、ネオリベラリズムとネオコンの違いはなんとなく分かった。

マリン　とりあえず、深津先生に「なんとなく」ながらも、ネオリベとネオコンが違うということを身をもって（笑）分かってもらうことができて良かったです。

八、交錯する議論、そして

深　津　きょうはどうも話が行ったり来たりしてる。でもそろそろ、なんか話をまとめたい…ってのは無理だから、この討論を通じて浮かび上がった課題・問題点などを挙げてみましょう。全体を通じてやはり思ったのは、新しい現象について語る言葉がないよね、っていうこと。近代からポストモダン。あるいは、東浩紀のいう「動物的」・「環境管理型権力」。こういった変化って、抵抗感を持ちながらも、なんとなくまぁ、実感できる。「アマゾン」のお薦めとかさ。まぁ、実感できるだけいいのかもしれないけど。ただ、その実感をどう言葉にしていくかがムズカシイ。たとえば、今回「新海誠論」を書いてても、結局は「他者」がいない、っていうオチになっちゃう。文学研究の用語系だと、どうしてもそこに行き着いちゃうわけ。でも、片方で新海誠に感動する自分っていうのがたしかにいて、その辺の批評（近代のパラダイム）と感想のギャップをどう埋めていくのか。同じことは、政治に関しても言えて、結局オレはネオコンじゃん？　ってことなっちゃうの？　それでいいのか…オレ？　みたいな（笑）　もっともネオかな？　ただのコンかもしれないけど。そのへんの区別が分からないので（笑）　でもまぁ、面白かったです。なんか、終りっぽいけど。

西　嶋　そうそう、「ポストモダニスト」を表明する（？）私が、意外と近代的だったりして。結局、「ポストモダン」や「近代」を引きながら、自己形成っていうか、自らの論を組み立てていくしかないっていうのはしみじみ感じますね。今は、まだ、

「それで何が悪い！」という気概を持ち合わせていますけど。そもそも、「新しい現象」っていうのが、本当に新しいのか、どこが新しいのか、っていうのがよくわかってないのかもしれませんね。私は、オタクを通して、それを見、対策を練ろうとしているのですが、うまくいってるのか、いってないのか、わかんない状態ですね。

深　津　マリンさんはどう？　積み残した問題とか、今回、人文系の分からず屋と議論して見つけた課題とか。

マリン　僕はネオリベラリズム論者として二人と議論として、政策や現実を掲げることも人文系から見ればイデオロギーなんだなということを実感しました。政策がイデオロギーであるかないかは別にしても、それがイデオロギーになりうるということに自覚的であることは、これから研究を続けていく上で重要な視点になると思います。お二人と議論をしなければ、僕は大手を振って「僕はイデオロギーから自由になったネオリベラリストだ！」と言ってたかもしれません。今では、想像しただけでちょっと恥ずかしいです（笑）　でも、僕はリベラルの分配主義も、保守主義の単なる経済自由主義も、どっちにも与したくないから、これからもネオリベラリズムの現実主義を掲げてお二人と闘っていきたいと思います。お手合わせ宜しくお願いします（笑）　とりあえず、僕はこれからネオリベキャラでいこうという自覚が生まれました（笑）

西　嶋　私は、ポストモダンを享受しながら、近代の再生を目指すキャラ‥なのか（！？）

深　津　なんだ、みんなキャラなのね（笑　オレは人間でいないなぁ。

西　嶋　フロイト的に抑圧された無意識が発露した誤字ですね。「人間でいないなぁ」は、「人間でいたいなぁ」って書こうとしたんじゃないですか。でも、人間なんてもういない。みんなもう「キャラ」や「動物」になってしまったという示唆を与える一文なのでは。

深　津　ホントだ！　すごい笑える。大ヒット！

マリン　だははは！！！

西　嶋　なんか、最後はやたら明るい雰囲気になってしまいましたが、いろいろと問題は山積です。色々と残ったものについては今後もそれぞれの研究分野で取り組んで行き、再度議論という形でより深めて生きたいです。「アユラ」の第二号があれば（！？）、そこでまた、こーゆうことできればと思います。とりあえずの締めですが、長い間の議論をいっしょにできたことに対して、深津さん、マリンさんに、お礼を言いたいです。ありがとうございました。そして、これからもよろしくおねがいします。

マリン　ありがとー、これからもよろしくぅ～！嫌われ者のネオリベだけど仲良くしてね（笑）

深　津　「ユーモア」で終ったよね、最後は。近代的でとてもよい。自分を見つめるもう一人の自分って話だもんね。でも、もちろん積み残しはたくさんある。「アユラ」第二号があるかは分かんないけど。じつはもう、解散でもよいかな、という気がしてたんだけどね。役割を果たした気がするし、みんなそれぞれの居場所で頑張ってるし。自然消滅より、何かをきっかけに解散ってほうがカッコいいし。でもまぁ、これからこの集まりをどうするかは、またあとでゆっくり話しましょう。一二日は会場に行くし。マリンさんはどう？　来れなくても、年内に打ち上げしましょう。その時に、今後のことも考えたいね。この集まりが今後どうなるにせよ、それぞれの専門分野での課題が見つかったいい議論ができたと思ってます。

（了）

アユラ第一期全号総目次

アユラ第一号（二〇〇六年一一月）
鼎談「交錯するポストモダン」西嶋×深津×マリン
論考「新海誠論」深津謙一郎
論考「民主党論」マリン
論考「異本　動物化するポストモダン」西嶋一泰
書評「サブカルを哲学する書」

アユラ第二号（二〇〇七年一一月）
鼎談「二〇四五年の計算不可能性」西嶋×深津×マリン
論考「「赤ちゃんポスト」の政策分析」マリン
論考「食のベーシック・インカム」西嶋一泰

アユラ第三号（二〇〇八年一一月）
鼎談「ロスジェネなんてぶっ飛ばせ！」西嶋×深津×マリン
論考「デスノートから何が見える」斉藤要
論考「セカイ系は社会からの出口なのか」瀬尾毅彦
論考「女性が働く時代　今が働くオマケつき」太田祐未
案内「ネットカフェ・ジャーニー」西嶋一泰

アユラ第四号（二〇〇九年一二月）
鼎談「アカデミック・サバイバル」西嶋×深津×マリン
論考「コミットメント“させる”作法」瀬尾毅彦
論考「瀬田宗次郎が探し求めた真実の行方」Ｋｏｙｕｋａ
書評「ヘンリー・ジェンキンス Convergence Culture」村上暁

あとがき

西嶋、深津、マリンの出会いは二〇〇一年に遡る。深津が始めて高校の現代文の非常勤講師として教壇に立った時、その生徒だったのが当時高校一年の西嶋とマリンだった。三人が出会った三鷹市の明星学園高校は自由な校風で知られ、個性にとんだ生徒や先生が集まっていた中で、当時からかなりフランクな関係を持てたことは三人にとって幸運だった。／　卒業後、西嶋とマリンは浪人生活に突入する。西嶋は池袋の河合塾に通うが、その河合塾の小論文の先生と親しくなり、その山田誠司先生が開設していた「やまだねっと」という掲示板上でアツい議論が繰り広げられるホームページに出入りするようになる。西嶋が、この「やまだねっと」に触発され、深津とマリンに声を掛け、二〇〇五年に自ら開設したのが、ウェブサイト「相関言論空間　アミノユラク」だった。西嶋、深津、マリンの三人が活発に議論をかわし、いろいろな人を巻き込んで議論が波及していった。このアミノユラクでの議論を同人誌にしようと思い立ち、批評誌『アユラ』を創刊したのが二〇〇六年。そこから四年の三人の議論の足跡をこのような形で残せたことは率直に嬉しい。よろしければ、これからもこの三人の議論にお付き合いください。（西嶋）

アユラ　第一期（二〇〇六―二〇〇九）保存版
二〇一〇年一二月五日　第一刷発行
著者　西嶋一泰・深津謙一郎・マリン
イラスト　浅乃ミサキ
発行所　相関言論出版会
印刷所　ＰＯＰＬＳ

Ayura